

常なる磐

つねなる いわ seasonⅢ

令和 5年 3月 3日(金)

ひな祭り その1 通算311号

◇ あらっ… 隆ちゃん!!!



岡崎の教職員に向けた月刊誌【岡崎の教育】。表紙の巻頭言は「教育随想」。岡崎市に所縁のある角界の著名人の方から、毎月、金言を拝読できる環境にある。教育関係者の言葉はもちろん胸に響き、自己をふり返る機会となる。そして、講演等がなければ耳にできない専門的な話も核心が教育に通じ、これまた面白い。見聞を広げる機会が至るところにある岡崎の教員は、本当に幸せ者である。

〔教育随想 執筆者 ※肩書・氏名は発行当時のもの〕

- ◆R2.11月号「伸び代を決めるもの」 岡崎女子大学・岡崎女子短期大学 学長 林 陽子 氏
- ◆R3.12月号「手について考える」 藤田医科大学岡崎医療センター病院長 鈴木克侍 氏
- ◆R4. 1月号「公助の真心」 岡崎警察署 署長 後藤安彦 氏
- ◆R4.10月号「歴史を学び、語ることの意味」 徳川記念財団 理事長 徳川家広 氏

さて、【岡崎の教育】令和5年2月号が手元に届いた。

表紙の巻頭言・執筆者のお名前を拝見して…「あれっ」。

続いて、やさしく微笑む執筆者の顔写真に視線を移して…「もしや」。

年相応に皴も備えたが間違いない。小・中学校時代の同級生「隆ちゃん」だ。

巻頭言のタイトルは「法学部・法科大学院での教育現場から思うこと」※裏面掲載
執筆者には、東京大学 法学部長 山本隆司(やまもと りゅうじ)とある。ぴったんこカンカン!

【Wikipedia】から得た「山本氏(隆ちゃん)の経歴」を簡単に紹介する。

◇岡崎高校から現役で東京大学文化I類(法学部・経済学部)に合格。

◇さらに、卒業と同時に法学部の助手に就任。

◇3年後、26歳の若さで東京大学法学部の助教授に就任。

◇2004年 東京大学・大学院法科政治学研究科教授に就任。 2022年 現職に就く。

※ドイツ・ハイデルベルク大学名誉教授ほか

ここまでの山本氏(隆ちゃん)の経歴は、リアルタイムで風の便りで耳にしていた。

当時、授業の脱線話で、

「立派な同級生がいてねえ。同い年で東大助教授だ。同級生というだけで鼻が高いよ。

同じ教師という立場だが、えらい違いだな…」などと自虐ネタにしていた記憶がある。

さて、巻頭言を拝読して気付かされ、頷かされ、働き甲斐を実感することになる。それは、『私は高校まで岡崎で学び、幸せな環境をいただいたことに感謝している。』という一節。 そしてこう思う。 『岡崎で働くことのできる環境を頂いたことに感謝』

法学部・法科大学院での 教育現場から思うこと



東京大学
法学部長 山本 隆司 氏

教育随想



令和5年2月1日

2月号

今月の紙面

教育随想…………… 1
東京大学
法学部長 山本 隆司 氏

この本を…………… 8

私は東京大学の法学部と法科大学院(今、テレビドラマの題材となっている「ロースクール」)で授業を行っている。また、研究者の養成に携わっている。以下、私が大学教育の現場で気をつけている点を綴ってみた。

第一に、法学部の大教室(大学入試の際にテレビ撮影される東大の教室)での授業や、法科大学院で全ての学生が履修する授業では、議論が錯綜しているテーマについて、学生の思考が空転しないように、何が重要な点か、どこで間違えやすいかを解きほぐして説明し、その意味で効率的に教えるようにしている。

第二に、少人数のゼミでは、学生が自身で問題を発見すること、問題に対して筋道立てて議論を組み立てること、異なる考え方を聴いて議論を充実させることを重視している。

第三に、研究者の道に進む人には、若いうちに、直接の成果に結びつかない、一見無駄に見える調査や思考をどれだけ重ねるかによって、その後息長く研究成果をあげ続けられるかが決まると説き、励ましている。

こうした教育の三つの方針・ステップは、いずれも必要かと思うが、学生も教員も時間に限りがある中で、うまく組み合わせる要する。これら三つのバランスが崩れると、試験で点数を取ることが自己目的化した¹り、逆に、独善的な議論を展開したりするだけになってしまう。

似た問題状況は、小中学校の教育現場にもあろうかと思う。東京では、受験競争が小学校、否、その前から始まり、余裕をもって適応できる少数の生徒を除き、往々にして生

徒に「のびしろ」がなくなってしまう。その点で、私は高校まで岡崎市で学び、幸せな環境をいただいたことに感謝している。今後も関係者の方々の知恵と力を結集して、岡崎市で生き生きとした学びの場が創られることを、願っている。

(やまもと りゅうじ)

